

河村錠一郎名譽教授年譜・主要著作目録

一九三六年四月十九日 東京都浅草区新福井町五番地に生まれる。父錠眞、母敏子の第二子長男。浅草、上野、両国、柳橋に接する卸問屋の多い地域で遊興三昧の旦那衆にはなから困まれ行く末を案じる。

一九四一年、遊園地の電気自動車に乗せられハンドル操作を知らず衝突を繰り返す、世の荒波の洗礼を受ける。後年、自動車免許はアメリカで取る。

一九四三年四月 浅草区立育英小学校入学。父の店舗から道一つ裏にまわったしもたやから通学。住居が隣の別のしもたやと壁をくりぬいてつながる。この時の不思議な感覚から、数年後、文学少女だった母の蔵書の江戸川亂歩に夢中になる。

一九四四年 大宮郊外に、さらにつづいて、尾張一の宮の父方の祖父母の家に疎開。多少とも経済的余裕のある少数派の都会子は白眼視される傾向があった。都会／不純、地方／純粹の通念に対する不信感の始まり。父は養子で、血のつながっていない孫に対する、食糧をめぐる祖父の冷たい仕打ちに母が必死に抵抗——子供心に既に大人世界の地獄を垣間見る。
一九四五年 名古屋空爆——真っ赤に染まる夜空を花火のよう

に見上げながら防空壕に駆け込む。八月、敗戦。新学期を東京で迎える(柳北小学校へ転入学)。一階が店舗、二階が住まい、三階が縫製工場という職住一体の家(現在の浅草橋二丁目)での生活になる。店員や工員たちを「……どん」と呼び、彼らに「錠ちゃん」と呼ばれる。二階の一部に松竹の助監督Y氏夫妻が間借り。松竹へ遊びに行く。全盛時代の水戸光子と写真撮影。同じ町内に家を新築。完成直前の家で父と二人、大晦日を過ごし元旦を迎える。

一九四六年 引越す。東京都の子供議会の議員にさせられ、教師の入れ知恵で「上野動物園に象の寄贈をインド政府に懇請しよう」という緊急動議を出し採択される。

一九四七年 浅草松屋の劇場で公演された『四辻のピッポ』に主演。ステージで拍手を受ける快感の初体験。後、ステージは教壇へ落下。母がその後を追って飛び下り、脚の骨が折れて飛び出す大怪我。弟の死は自分の責任とばかり衝動的に飛び下りた、と手術後に聞く。弟は怪我一つなかった。この事件を綴った作文が校内に張り出される。公にされた最初の文

章。ペニシリンの投与で母は助かる。当時はまだ非常に高価だった。父が見事な藤の大鉢を病室に贈る。この花のイメージが後の園芸趣味の原点になる。算盤検定試験で三級を取る。一九四八年、「象」を都議会へ請願する代表から発議者であるのに外される。女子の方が受けがいいという。教育の中の政治を初体験。

一九四九年四月 東京教育大学付属中学校に入学。ほとんどが付属小学校上がりのちびっ子エリートたちで、区立小学校からの受験組みは少数派ですこぶる居心地悪い。学級委員を一年間つとめた後は鳴かず飛ばず。九月、上野動物園にインドから象が来る。

一九五二年四月 付属高校へ進学。机を並べた友の何人かが別の高校へ。野村四郎（現、能楽師）ともK嬢ともお別れ。

一九五三年父、胃潰瘍で倒れる。クラスの友人の父で当時の賢所の待医I博士の診断を受ける。恢復。

一九五四年 父の店倒産。竹町の裏路地の小さな家へ引越す。突然未来が見えなくなる。

一九五五年三月、東京大学受験失敗。他大学は手続きのみで受験せず。四月、教生として懇切な指導を下さった大学院生N氏の薦めで城北予備校に通う。N氏を大学に度々訪問。氏が友人達に「あれは君のチヨ（稚児）さんか」と冷かされるのを目撃し、辞書を引いて遅咲きの目覚め。成績優秀で張り出された名前の中に自分を見つけ訪れたN氏に見せる。

一九五六年四月 東京大学（文科二類）入学。

一九五七年夏 文芸同人誌「パロ」の創刊を目指して活動開始。

以後、六号まで発行。

一九五八年 教養部文科二類二年生全体での成績順位を手渡され学科選択を決めることになる。クラスの才媛M嬢に順位の見せ合いを迫られる。四番、M嬢は十一番。面目を保つ。四月、法学部（文科一類）への転進を親に仄めかされ、外交官のイメージがちらりと頭を過ぎるものの英文科に進学。

一九五九年十二月 学士論文「Edmund Spenser and the Faerie Queene」提出。

一九六〇年四月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（英語英文学）入学。

一九六一年四月 桐朋学園大学非常勤講師。十二月 修士論文「The Swaying Pendulum——an Essay on Marvell's Lyrics」提出。

一九六二年四月 東京大学大学院博士過程入学。台東区台東四丁目へ転居。

九月 院生同人誌「Pursuit」一号に「Groatsworth of Wit」を発表。

一九六三年四月 共立女子大学短大部非常勤講師。

一九六五年三月 東京大学大学院博士過程単位取得満期退学。四月 一橋大学経済学部講師就任。

九月 「Pursuit」五号に「Nasheの場合」を発表。ジョン・ダン『唄とソネット』序論（人文科学研究所）

一九六六年三月 「ジョン・ダン『唄とソネット』序論」（人文科学研究所）八号。「最近のマーヴェル研究から」（英文学会機関誌「英文学研究」）

十一月 「形而上詩誕生の背景」（言語文化）三号。

一九六七年三月

中村双葉と結婚。披露宴にゼミの学生たちが飛入りで余興。国立キャンパス内の公務員宿舎R棟に住む(後、新築なったRC棟へ転居)。

五月 共同執筆「パステイリシユの工匠——エズ

ラ・パウンド理解のために」(季刊「世界文学」六号)。八月、「マニエリスム」パロック研究史におけるA・ハウザーの位置」(「一橋論叢」八月号)。

一九六九年二月 助教昇進。「ルネサンスの影」(「一橋論叢」

二月号)。八月、「余りもの」の主張」(「一橋論叢」六十二巻五号)。

一九七〇年六月 初めての本、翻訳『エレジー・唄とソネット』(ダン詩集) 出版(現代思潮社)。この本をエッセイで扱った旨の丁寧な葉書を大岡信氏から、追って掲載誌(「国文学」九月号)を、いただく。七月「刺し殺されたロゴス」(文芸雑誌「海」七月号「マニエリスム特集」)―名物編集者、安原顕氏との付き合いが始まる。「英語文学世界」(八月号)に「詩のことは」執筆。九月、娘の美陽出生。十月、英文学大会シンポジウム「奇想の系譜——英文学におけるマニエリスム的なもの」に講師として参加。十一月、朝日新聞のコラム「研究ノート」に「近代主義とグロテスク」執筆(十一月五日夕刊)。

一九七一年六月 『伝統と現代』誌に「観念の跳梁と死」発表(「七号」変身」特集)。七月、シエクスピア夏期講習会で「エ

リザベス朝の恋唄―シェイクスピアとダン」講演(会場、青山学院)。「中央公論」(八月号)に川田喜久治の写真集『聖なる世界』の書評「魔性の恐怖」執筆。同号掲載大ベストセラ「甘えの構造」の書評に気圧されて目立たず。

サイファー著『現代文学と美術における自我の喪失』翻訳出版(河出書房)。この出版あたりから美術分野への境界侵犯目立ち始める。

一九七一年「ユレイカ」(十一月増刊号)に「ヘルマフロディトスの生と死」。「英語青年」(十二月号)に「閉じた詩と開かれた詩」執筆。

一九七二年一月「日本読書新聞」にクレイバラー著上島他訳『グロテスクの系譜』の書評執筆(一月十七日号)。この頃から「グロテスク」「世紀末」「マニエリスム」「パロック」関連記事の執筆依頼暫時続く。「理想」二月号に「森と大工のディアレクティク」執筆。カネッティ『群衆と権力』の訳本の書評執筆(「海」四月号)。十月、「言語文化」に「キリストの花嫁は誰か―ダンの宗教詩一篇を論ず」を執筆。これより先「英語青年」四月号から一年間、鼎談合評「シェイクスピアのソネット」連載。

一九七四年 共著『ルネサンスと反ルネサンス』(学生社)。

一九七五年二月 筑摩世界文学体系・第八十六巻の月報に「ワイルドと美のマゾヒズム」執筆。

八月 ハーヴァード大学イェンチェン奨学金を得て

同大学に客員研究員として翌年八月まで滞在。フォッグ美術館、ボストン美術館に足繁く通

う。画家ピアズリー及びラファエル前派に關心を持ち始める。大学のサンダーズ劇場で初めてポルリーニのピアノを聴く(無料)。

雪の中をボストンへ出掛けホロヴィッツを聴く。十回のレッスンでめでたく運転免許取得。ニューヨーク、ワシントン、ヴァージニア州等へ旅行。エール大学訪問の際、柄谷行人氏夫人のもてなしをうける。夏、カナダ側からナイアガラを見るために大旅行を敢行。ハイウェイを必死に走る。途中、タングルウッド音楽祭に寄る。

九月

オランダ、イタリヤ、フランス、オーストリア旅行の後、イギリスへ入る。ケンブリッジ大学客員研究員としてケンブリッジのオックスフォード・ロードの借家に滞在。ロンドンテニスを楽しむ。デレク・ジャーマンの映画「セバスタチャン」を見る(後、日本は映倫修正版のみ公開)。

サイファア著『ルネサンス様式の四段階』翻訳出版(河出書房)。

一九七七年 イギリス各地へ愛車オースティン・ミニで旅行。

八月 帰国。共著『ルネサンスの文学と思想』(筑摩書房)。「現代思想」十月号特集「貨幣」にエッセイ寄稿。

一九七八年 英文学会大会シンポジウム「シェイクスピアのソ

ネットへのアプローチ」に講師として参加。増進会の月刊誌「Z.A.R.E.」に対談「ルネッサンス」連載(聞き手は編集部)。「ピアズリーと性のアンビヴァレンツ」(「現代思想」五月号)。「ソドムのハムレット」(「現代思想」九月号)。高階秀爾氏と対談する——「方法としての精神分析」(「現代思想」十月号。司会は当時の編集長、三浦雅士氏)。「ピアズリー私論」(「カイエ」十月号)。松岡正剛氏からの依頼で雑誌「遊」に「ファンシー・マシンのある店で」を寄稿。ハックスリー著「知覚の扉」翻訳出版(朝日出版社)。

一九七九年 「ペヨーテ、そして世紀末」(「カイエ」五月号)。「模倣と模倣」(「ユリイカ」六月号)。雑誌「遊」(九月九日発行)にデヴィッド・ボウイや沢田研二等の写真と共に「殺人未遂事件から」が掲載される。週刊朝日百科・世界の美術「五十四号(バロック)」に執筆。

一九八〇年 「芸術の構造と性の構造」(「現代思想」一月号)。「シェイクスピアと音楽」(「期刊都響」二十六号)。「世紀末の美しい化粧の下に」(NHK機関誌「フィルハーモニー」五月号)。「恍惚」にエクスタシスはあったか(「現代思想」八月号特集「エクスタシスの哲学」)。「ワイルドとサロメの系譜」(「ユリイカ」九月号)。最初の著書「ピアズリーと世紀末」を出版(青土社)。「イーゼンハイムの祭壇画」(「フィルハーモニー」十二月号)。「ロンドン演劇のフリンジ」(朝日新聞十二月三日号)。

一九八一年 「世紀末とロマン主義」(中央大学発行「中央評論」六月号)。寺山修司氏と対談する——「青ひげの犯罪の

謎とジル・ド・レ侯爵」(新書館発行『ペロー・狼とガラスの靴幻想』所収)。この時から劇団「天井桟敷」の公演に毎回招待される。「コルヴォー男爵」(「海」九月号)。「帰属と演劇」(「夜想」十月号)。

一九八二年「聴く者の身に合うペーターヴェン」(「レコード芸術」一月号)。「普通へ飛翔するエロス」(「現代詩手帖」五月号)。「黄色考現学」(「is」六月「色」特集号)。

夏、イギリスに滞在。「一八九〇年代研究学会」の秘書(事務総長)K博士を訪問、『ピアズリーと世紀末』を贈呈。博士宅でピアズリー展を企画推進中の東京新聞の記者M氏に出会う。後の一連の美術展監修の原点。「一九〇〇年の回想」(「夜想」七号)。

一九八三年 日本英文学会大会準備委員を務める(三年任期)。「ブルックナーはただ一つの未完の交響曲を書いた」(「レコード芸術」一月号)。前田愛著『都市空間のなかの文学』書評(「海」四月号)。「演技する冗舌体」(「ユリイカ」四月号)。「ピアズリー展」(伊勢丹美術館)のオープニング・レセプションパーティでV&A美術館のスーザン・ランバート女史を紹介される。「ピアズリー時代再現か」(「公明新聞」五月三十一日号)。「天才と新しい時代の波―異色の画家ピアズリー」(「東京新聞」六月二十一日号)。七月、ブリヂストン美術館でピアズリーの講演をする。

一九八四年「絵画、文学、そして音楽―美が結ぶもの」(「フィルハーモニー」二月号)。「知」の祭礼から「情」の祝祭へ」(「ユリイカ」三月号)。三月、入試採点業務を終え

ですぐさまロンドンのテート美術館へ「ラファエル前派展」を見に行く。スーザンから送られた招待状が威力を発揮し、大冊の図録を載く。イギリス絵画部門のパリス氏と面会、話しをする。二週間滞在。帰国後、「新美術新聞」と「公明新聞」に報告記事を書く。「異才たちの出逢いの舞台―ロンドン」を「現代詩手帖」四月号(特集世紀末都市)に執筆。十一月二十四日、上智大学で公開講義「ベイターのルネサンス観」(ルネサンス研究所主催、後同研究所編『ルネサンス観の変遷』に収録される)。同じく十一月、ブリヂストン美術館で講演「愛と死と永遠の女性―ワグナーと世紀末の画家たち」(地中海学会主催・連続講演「美術と音楽」)。講演後、音楽之友社から連続講演すべてをまとめて一冊の本にしたいというコンタクトあり。結局、他の講演者(木島俊介氏、山口昌男氏、高階秀爾氏、遠山一行氏、鍋島元子氏)の意見まとまらず、ご破算。これがきっかけで「音楽芸術」に「音楽と美術―愛と死と永遠の女性」の連載を始める(二年二カ月に及ぶ)。「厳しさと陶酔の悪魔的合体」(「レコード芸術」別冊「フルトヴェングラー」)。「アール・ヌーヴォーからアール・デコへ」(「ユリイカ」十二月号)。

一九八五年正月 突然首に激痛、腕が上がらない。監修役を務める美術展の図録や関連記事の雑誌・新聞への大量執筆で頭骨間板ヘルニア。しかし、無事「ラファエル前派とその時代展」開催(一月二十六日―伊勢丹美術館)。同展に関連してNHK「日曜美術館」に出演(司会は浜美枝さんと国井アナ)。「芸術新潮」に「ラファエル前派―運命の女たち」寄

稿(二月号)。澁澤龍彦著『太陽王と月の王』書評(週刊ポスト)二月二十二日号)。この後、澁澤氏から近著を贈られる。雑誌「一枚の繪」(四月号)にエッセイ「ペアータ・ペアトリックス」寄稿。十一月、ブリヂストン美術館で講演(「サロメからキリストへ——『画家マティス』をめぐって」)。「イギリスの中の日本——ピアズリーのジャポニスム」(「橋論叢」九十四卷六号)。

一九八六年二月 ポストン交響楽団来日公演(小沢指揮)のプログラムに「ポストン——クラシックの似合う街」執筆。婦人雑誌「マリ・クレール」四月号に「ひっそりと思づく愛の不安——十九世紀ドイツ絵画名作展」執筆。当時、編集者安原氏の方針で男性も読む雑誌へ変身していた。この頃観劇の帰り、男性読者に声を掛けられる。『世紀末の美学』出版(研究社)。『コルヴォー男爵——知られざる世紀末』出版(小澤書店)。七月、山本和平氏磯田光一氏等の尽力で前記二著の出版祝賀会(銀座、日航ホテル)。「マリ・クレール」九月号に「風景を追い続けた画家、ターナー」執筆。『寺山修司の戯曲』第五巻の書評を書く(「現代詩手帖」九月号)。「リケッツ&シャノンの北斎コレクション」(「学燈」八十三卷九号)。九月、共著『美神と殉教者』(辻邦生編集、集英社)出版。一九八七年「ダリッヂ美術館展」関連記事を読売新聞(二月十五日号)に書く。「バーン・ジョーンズと後期ラファエル前派展」監修(伊勢丹美術館)。美術展図録に「記録のない時間——バーン・ジョーンズ美学の深海を探る」執筆。美術展解説記事を東京新聞に執筆。「永遠に醒めない(眠り姫)——

バーン・ジョーンズの世界」(「マリ・クレール」三月号)。三月、「西洋の美術」展始まる。関連記事を「読売新聞」(四月七日号)と「週刊読売」に書く。「日本へ来たジュリエット」(「シェイクスピアリナー」第五巻)。「マーラーは私を回顧的にする」(音楽之友朋冊「マーラーのすべて」)。「絵画と音楽の接近」(「聖教新聞」十一月二十八日号)。

一九八八年一月 『マニエリスムとパロック』出版(青土社)。サイファア著『ロココからキュビスムへ』翻訳出版(河出書房)。

二月 府中市西原町四丁目に家を新築、転居する。自著をもとに一人芝居用の台本『コルヴォー男爵——黄昏のヴェニス』を書く(画廊美蕾樹の主宰者、生越燁子氏の依頼)。生演奏つきの芝居なので、音合わせを自宅で。

六月 青山スパイラル地下のレストラン「CAY」で上演。千秋楽の幕がはねてから、新宿で祝宴。祝宴の記事が写真つきで「流行通信」創刊号に掲載される——宴の出席者は生越氏、黒田邦雄氏(映画評論家)、一人芝居を熱演した田村連氏、河村の招待客、井上倫宏氏(劇団「円」の青年俳優)。電車がなくなった井上氏を西原町の家に案内、泊まっていた。

五月 日本英文学会大会シンポジウム「世紀末——モダニズムの契機」の司会を務める。辻邦生、

若桑みどり、小池滋、出淵博の四氏に講師を依頼、聴衆五百人に及ぶ。以後、辻氏との交誼続く。

九月十五日 文部省在外研究員として二箇月間ヨーロッパ滞在のため出発(ベルリン、ミュンヘン、フイレンツェ、パリ、アムステルダム、ロンドン等)。十月九日、ラスキン文庫主催の研究講座で講演―「バーンリッジ・ジョーンズとラスキン」(「ラスキン便り」第十四号に掲載される)。

一九八九年(平成一年)「フィルハーモニー」(二月号)に「さまざまな音楽―シェイクスピアをめぐって」執筆。「ヴィクトリア朝の絵画展」監修(伊勢丹美術館)。図録に「明治時代のワッツ熱愛」執筆。二月十二日、「日曜美術館」の「世紀末の夢―オーブリー・ビアズリー」に出演(司会は加賀美アナ)。「朝日ジャーナル」書評委員(書物と評者の選定)を翌年二月まで一年間務める(匿名)。時に自身でも書評を受け持つ(七月二十一日号、十月十三日号、十二月一日号)。イギリスとの国際交流専門委員会(略称、イギリス委員会)の委員を務める(定年退官まで)。

一九九〇年 J・マーシュ著『ラファエル前派画集(女)』翻訳出版(リプロボート)。シェフィールド大学へ交換教授として出向くため、英語による講義準備を始めるが「ロセット展」監修の仕事もあってはかどらない。最後には開き直り、既発表の日本語原稿を現地で即席で英語にすることにす。

八月、映画「ロックと泥棒、その妻と愛人」(監督グリーナウエイ)のプログラムに「色彩の氾濫は欲望のドラマを映し出す」を書く。ヘンダーソン著川端ほか訳『ウィリアム・モリス伝』書評(「マリ・クレール」八月号)。九月二十二日、英国祭の一環としての「ロセット展」始まる(文化村ザ・ミュージアム)。レセプションに出席。図録に「日本とD・G・ロセット」を書く。数日後、シェフィールドへ出立。シェフィールド大学で「ヨーロッパ世紀末美術」の講義をする。

一九九一年「シェフィールド便り」を梶本音楽事務所の依頼で同事務所主催の演奏会プログラムに隔月寄稿。事務所の手配で招待を受けバーミンガム市響の演奏会を聴きにバーミンガムへ日帰り旅行。ラトルの指揮に感激。「ロイヤル・パレエ(シラノ)世界初演」を「ダンス・マガジン」八月号に寄稿。夏休み、家族でヨーロッパ旅行。アムステルダムの運河の底まで(タクシーが事故で沈没して)見学し、イギリスへ戻る。

一九九一年九月 帰国。共著『創造力の変容』出版(研究社)。
一九九二年三月 K・クラーク著『ベスト・オブ・ビアズリー』翻訳出版(白水社)。六月、一橋大学開放講座で公開講義をする(ヴィクトリア朝と世紀末の絵画)。十月、「西洋絵画のなかのシェイクスピア」展を監修(伊勢丹美術館で十月二十九日オープン)。十一月、「恒松正敏展」始まる(丸の内画廊)。過日、美雷樹で知って以来注目している画家。図録に「意識下へ潜入する眼」を執筆。朝日新聞(夕刊) コラ

ム「出会いの風景」連載(全五回)。そのコラムでも取り上げたところ地方の恒松ファンから問い合わせが来る。

一九九三年二月、ひろしま美術館で講演。一泊後、高松市に巡回した「西洋絵画のなかのシェイクスピア」展の講演で高松へ行く。三月、昔の翻訳『エレジー・唄とソネット』を基にした朗唱劇の再演のため大阪へ行く(初演は東京の美樹樹。役者は田村氏)。パレエ雑誌「ダンス・マガジン」(十月号特集「ロミオとジュリエット」)に「四日間の伝説」を執筆。

この頃からパレエ/ダンス評論が散発的に続く。もともと好きな舞台芸術にかかわるようになったのを喜ぶ。TOSHI主演のロック・オペラ『H A M L E T』(十一月十二日〜二十一日中野サンプラザ大ホール)のプログラムに「世紀末の愛、ハムレットの愛」を書く。総稽古にも立ち会う。公演当日は夫婦で、役者の井上倫宏氏も招待して、観劇。熱烈なTOSHIファンたちの嬌声に翻弄される。

以下は主立った事柄・執筆活動のみを記す。

一九九三年 「ジョン・ラスキンとヴィクトリア朝の美術」展監修。図録に「ラスキンの美学」を書く。『寺山修司メモリアル』(読売新聞社)に「赤い櫛——寺山修司の世界」を執筆。九月二十三日、ブリティッシュ・カウンスル主催日英国際会議の司会を務める。

一九九四年五月 パレエ公演(ルジマトフのすべて)のプログラムに「ルジマトフ賛」を書く。公演のゲネプロも見学。

一九九五年 季刊「パレエの本」(音楽之友社)十三号から連

載を開始。総タイトルは「芸術の華——パレエへの誘い」。

一九九五年一月 イギリス委員会で招聘したJ・マーシュー女史(美術史家、ラファエル前派の権威)のお世話をす。冬の京都、奈良などを案内。

一九九六年 日本を代表する男性パレエ・ダンサー坂本登喜彦氏(一九九五年度「芸術選奨」文部大臣賞受賞)と対談、「パレエの本」一六号に掲載される。

五月一日 一橋大学大学院言語社会研究科創設、同研究科教授となり、講座「社会言語」の中で「非言語情報」の一環として美術史を担当。

六月一日、ブリヂャストン美術館で講演「オスカ・ワイルドと三人の画家」。

一九九七年三月 ロンドンのかつて画家ホイッスラーのアトリ

エだった家に住む挿絵芸術研究のエンゲン氏を訪問。別の日、世紀末芸術の大コレクター、アーワズ氏を訪問。夏、蓼科の山荘で「ビアズリーと世紀末」展の図録の監修、執筆に没頭。

十一月六日 「ピアズリーと世紀末」展開会(伊勢丹美術館)。(前日、展示作業に立ち会う。)

ピアニスト青柳いづみ氏のCD(ドビュッシー)の解説執筆。

一九九八年三月 『オーブリー・ピアズリー——世紀末、異端の画家』出版(河出書房)。巻末の年表およびコラムの二つを

院生の石井康朋君に頼む。四月、岐阜県美術館で講演。「英語青年」八月号ピアズリー特集に「ピアズリーの日本、ピアズリーのイタリア」を発表。

一九九八年 読売新聞三月九日号に「文学に急接近した絵画」、同二十三日の毎日新聞美術欄(二枚の絵)にホイットスラーの作品について寄稿。十一月、『世紀末美術の楽しみ方』出版(新潮社)。

一九九九年春 美術雑誌「プリンツ二十一」で画家金子国義氏と対談。十一月、ロンドンの美術史家ニューアル氏を訪問、美術展監修の打ち合わせ。「一〇〇年前の世紀末——愛をめぐって十選」を日本経済新聞に連載。

二〇〇〇年三月 最終講義。一橋大学を定年退官。

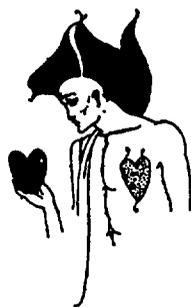
四月 一橋大学名誉教授の辞令。帝京大学文学部国

際文化化学科教授就任。監修した「ラファエル

年譜補遺

前派」展、滋賀県立近代美術館でスタート。講演に出向き、図録制作に見事に力を発揮した占部敏子氏(かつてのゼミの学生)に再会。五月十三日、同展、東京へ移る(安田火災東郷青児美術館)。前日、レセプションで挨拶。図録論文「ラファエル前派——自然主義、象徴主義、そして唯美主義」(英語訳をマクリントック女史に依頼して併載)。

非常勤講師歴——津田塾大学大学院、御茶ノ水女子大学大学院、東京大学西洋近代文学科、武蔵大学大学院、一橋大学大学院(退官後の一年間)、明治大学大学院(現在も続く)。集中講義歴——東北大学、弘前大学。



編集後記

昨年度、河村錠一郎先生が退官されました。言語社会研究科設立以前からの先輩同僚である先生が去られるのは、まことにさびしい思いです。特に、あの伊達ともいえる洒落たお洋服と身振りにキャンパスで、お会いすることが少なくなるのは残念です。就職してすぐの時期に、ゼミ紹介の冊子で先生のお写真を拝見したいへん驚きました。宝塚のプロマイドかと思ふような、しゃれた格子のベレーをかぶり、正面を向かずに少し肩をねじった姿勢で写っておられたからです。大変な先生がおられるものだという印象を持ちましたが、実際お会いして、写真だけではないということがわかりました。意識しておいでのことと思われる気取りがすっかり板に付き、美を愛し探求し表現しようとする美術研究家の心意気が、

見るものに伝わってくるお姿です。雨の日に、白いレインコートの裾をさっとはらって教官室に入ってこられる動きには、舞台上に登場するような雰囲気がありました。

一橋大学では、西洋美術に関する講義と英語や英詩の授業を三十年以上にわたって続けてこられました。受講した学生は、社会科学の教官と一味ちがう人文科学の研究者のなかでもまた独特な河村先生の授業に触れて、大学の学問の多面性を感じ取ったことと思われまふ。何人かの学生が美術史に興味を持ち、先生のゼミに参加して研究をはじめたのも、その魅力のなせるわざでありまふ。

ご専門の研究は英国美術家、とくにラファエル前派の画家たちを対象にしておられました。世界中の美術館のみならず作品のある教会や記念館や個人宅を訪れて、克明に調査されるのは、大変なご苦労であったと思われまふ。現在よりずっと交通の便も悪く費用も潤沢ではなかった時期からのお仕事です。画家の性格と画題と当時の芸術思潮との関わりから、

美術作品を分析検討する先生の論文には、描かれた絵の世界に対する愛情があふれていると思われまふことがしばしばでした。相当大胆な説を主張されるので、最初は半信半疑の読者も、河村式の論調に説得されてしまふところがありました。耽美的で世界の裏側を見ているような目付きをした絵の人物たちを、先生は現世にしっかり身を置きながら、少し足を宙に浮かしてのぞきこまれていたようでした。

『国立学報』に書かれた退官のことばの題名は「諸君、さようなら」でした。別れを惜しんで送り出すはずの私たちの口を封じようと思われまふような、いかにも河村先生らしいお言葉と思ひました。それでも、これから先生が退官後に赴任された帝京大学においても、お元気で、ダンディーぶりを発揮されますますご活躍されますよう心から願っています。

(言語社会研究科教授 古澤ゆう子)